高校生における社会的達成目標と過剰適応の関連

○篠原由花

(学習院大学大学院人文科学研究科)

キーワード：社会的達成目標、過剰適応、高校生

The Relation Between Social Achievement Goals and Over-Adaptation in High School Students.

Yuka SHINOHARA

(Graduate School of Humanities, Gakushuin University)

Key Words: Social Achievement Goals, Over-Adaptation, High School Students.

目 的

近年、社会場面における達成目標である社会的達成目標 (Social Achievement Goals; 以下 SAG) への注目が高まっている。SAG とは、社会場面における行動を動機づける社会的コンピテンスに対し、個人が持っている異なる達成目標の志向性 (Ryan & Shim, 2006) のことである。Ryan らは、SAG を社会的発達目標 (Social Development Goal; 以下 SD)・社会的提示-接近目標 (Social Demonstration-Approach Goal; 以下 SD-Ap)・社会的提示-回避目標 (Social Demonstration-Avoid Goal; 以下 SD-Av) の 3 つに分類した。SD は、自身の社会的コンピテンスを発達させていくことに注目した志向性である。SD-Ap は、社会的コンピテンスを他者に示し、自身が社会的に望まれているというポジティブな評価を得ることに注目している。そして、SD-Av では、社会的コンピテンスが欠落していないことを示し、他者からのネガティブな評価を回避することに注目した志向性である。先行研究から、SD は適応的で、SD-Av は不適応的であることが見出されている。SD-Ap は適応との複雑な関係が示唆されている。ところで、SD-Ap・SD-Av は他者の評価が自身への評価の基準となることに大きな特徴を持つが、実際にはどの程度他者の意に沿うような行動をとるのだろうか。

石津 (2006) は、個人が自身の内的な欲求を抑圧し、外的な期待や要求に応える努力を行うことを過剰適応とし、その尺度を作成した。過剰適応尺度は、他者志向的な適応方略を指す他者配慮・期待に沿う努力・人から良く思われたい欲求の 3 因子 (外的側面) と個人の性格特性を指す自己抑制・自己不全感の 2 因子 (内的側面) で構成されている。

本論では、SAG と過剰適応との間にどのような関係がみられるかを検討する。

方 法

参加者 都内の公立高校に通う高校 1 年生 112 名 (男子 39 名、女子 49 名、不明 24 名)

手続き ホームルームの時間に配布・回収を行った。

質問紙の構成

- ・社会的達成目標尺度 (Ryan & Shim, 2006) 全 12 項目
- ・過剰適応尺度 (石津, 2006) 全 33 項目

質問紙には他の尺度も含まれていたが、今回の分析には用いなかった。

結 果

まず、SAG および過剰適応尺度の確認的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った。SAG は SD・SD-Ap・SD-Av の 3 因子構造を見出した篠原 (準備中) に従って得点化した。過剰適応尺度は、作成者の想定に従い、他者配慮・期待に沿う努力・人から良く思われたい欲求・自己抑制・自己不全感の 5 因子を抽出した。信頼性はそれぞれ .87, .85, .88, .88, .76

だった。

次に、SAG と過剰適応の相関を下位尺度ごとに調べた (表 1 参照)。その結果、SD は過剰適応の自己抑制以外の因子と正の相関がみられた。SD-Ap は他者配慮、期待に沿う努力、人から良く思われたい欲求と正の相関がみられ、SD-Av は自己不全感以外の各因子と正の相関がみられた。

表1. SAG と過剰適応の相関

	他者配慮	期待に沿う努力	人から良く思われたい欲求	自己抑制	自己不全感
SD	.51**	.38**	.52**	.11	.27**
SD-Ap	.19*	.39**	.25**	.18	.11
SD-Av	.23*	.48**	.49**	.35**	.18

* $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

今回得られた結果から、SAG と過剰適応との関連は志向する SAG により異なることが示された。仮説とは異なり、SD が高いとき、過剰適応の外的側面と内的側面の自己不全感が高いことが示された。これは、現代青年に特有な人間関係の持ち方が影響しているのかもしれない。良い人間関係を保つには、“空気を読む”といった言葉に表されるように、他者の意図を感じとり、その場に合った態度や行動をとることが求められる。そのため、SD と過剰適応の外的側面との関連がみられたのだろう。しかし、一方で他者や場に合わせて行動することは自身の欲求などを抑えることにもつながるため、自己不全感が高かったと考えられる。SD-Ap は、自身のコンピテンスを他者に示し、ポジティブな評価を得る志向性だが、そのためには周囲に自身の優勢を示すこともあるだろう。他者への配慮を優先すると、自身の優勢を示すことは難しいために、SD と比較して他者配慮・人からよく思われたい欲求との相関が中程度に留まったのではないだろうか。SD-Av は、概ね仮説通りの結果が得られた。自己不全感との関連はみられなかったが、これは、回避的な志向性を持つとき、自身の内面への関心も薄いためと考えられる。

今後の研究では、青年がどのような友人関係を構築しているかなど、より詳細な検討が必要だろう。

引用文献

石津憲一郎 (2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第 39 回大会発表論文集, 137.

Ryan, A. M. & Shim, S. S. (2006). Social Achievement Goals: The Nature and Consequences of Different Orientations Toward Social Competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 1246-1263.